

千葉県建築文化賞

第19回表彰作品集



2012年

主催：千葉県 共催：社団法人 千葉県建築士会

千葉県建築文化賞について



千葉県知事 森田 健作

平成24年度の千葉県建築文化賞に多くの皆様から御応募をいただき、誠にありがとうございました。

千葉県建築文化賞は、居住環境や建築文化に対する県民の意識の向上と、うるおいとやすらぎに満ちた快適なまちづくりを推進することを目的に平成6年度に創設されたものです。

第19回目となる今年度は、74点の応募をいただき、千葉県建築文化賞選考委員会による厳正な審査の結果、建築文化賞6点及び建築文化奨励賞3点が選定されました。

受賞作品は、いずれも良好な景観形成や建築文化の向上につながるものであり、また、千葉の魅力を高め、地域の活性化にも貢献する素晴らしい作品です。これらの建築物が、地域社会の中で親しまれ、より良いまちづくりの推進に貢献していくものと期待しております。

さて、県では、総合計画「輝け!ちば元気プラン」に基づき、計画の基本理念である「くらし満足度日本一」を目指した取組を進めております。千葉県建築文化賞表彰制度もこの取組の一つであり、県では今後も、千葉県のさらなる飛躍を目指し、「チームスピリット」の精神を発揮して、だれもが安心して快適に暮らせるまちづくりを進めてまいりますので、県民の皆様の御理解と御協力を宜しくお願いいたします。

結びに、選考委員をはじめ、関係団体の方々の御協力に感謝を申し上げますとともに、受賞者並びに応募いただいた皆様の今後ますますの御活躍をお祈り申し上げまして、あいさつといたします。

平成25年3月

目 次

千葉県建築文化賞について	1	雑木林のまち	7
第19回千葉県建築文化賞選考経過と総評	2	柏市立柏の葉小学校	8
大多喜町役場庁舎	3	Mアパートメント	9
桜井邸／多面体の屋根 館山	4	ワーズワース佐原店	9
さくさべ坂通り診療所	5	アース・ブリックス	10
南流山の家	6	千葉県建築文化賞の選考の基準	10

第19回千葉県建築文化賞選考経過と総評

応募74点から9点入賞

(選考経過)

千葉県建築文化賞選考委員会委員長 北原 理雄

第19回千葉県建築文化賞は平成24年6月の委員会で募集要領を定め、7月上旬から9月中旬まで応募を受け付け、総数74点の応募をいただいた。(部門別内訳は下表のとおり。)点数は昨年より34点減少した。景気低迷がつづき、東日本大震災の復興に追われる現状では致し方ないことである。きびしい情勢のもとで建築文化向上のためにご協力いただいた方々に深く感謝したい。

第1次選考はすべての応募用紙を一堂に展示し、その記載と写真をもとに2回の投票を行ったうえで、景観部門6点、ユニバーサルデザイン部門3点、環境部門4点を選んだ。次いで11月の3日間をかけ、現地を訪問し、建築物の説明を伺いながら詳細に調査した。第2次選考は12月開催の委員会で、現地調査の報告を踏まえて再度投票を行い、討議を重ねながら優秀な建築物を選んだ。

なお、今回も選考の公明性を保つため、委員と関係のある建築物が応募されている場合は、そのことを確認したうえで、当該委員は討議に参加せず、票を投じないこととした。

その結果、建築文化賞6点、建築文化奨励賞3点を表彰候補作品として決定した。今回の授賞作品はいずれも中小規模の建築物であり、住宅が4件含まれている。派手さはないが、密度の高い作品に恵まれたと考えている。

募集部門	選考過程	応募点数	現地調査 (第1次選考)	受賞作品選定(第2次選考)	
				建築文化賞	同 奨励賞
景観上優れた建築物		42	6	2	2
ユニバーサルデザインに配慮した建築物		11	3	2	0
環境に配慮した建築物		21	4	2	1
合計		74	13	6	3

(総評)

景観上優れた建築物

景観部門への応募は42点で、昨年度の73点を大きく下回った。公共施設と住宅に佳作が多く、授賞作品のうち2点は保存・修復に関係するものであった。

建築文化賞の「大多喜町役場庁舎」は、今井兼次の設計による旧庁舎(竣工1959年)の改修と増築であり、近代建築へのオマージュを込めた改修と、城下町の面影を残す街並みとの調和を意識したシンプルな増築棟のデザインが高く評価された。

「桜井邸／多面体の屋根 館山」は、緩やかに弧を描く砂浜に面して建つ別荘であり、ピロティで支えられ、水平に伸びる開放的な2階から富士山を正面に望むパノラマを満喫できると同時に、多面体の屋根を載せた軽やかなファサードが海辺の景観を心地よく引き締めている。

奨励賞の「ワーズワース佐原店」は、東日本大震災で被災した町家を保存・修復し、飲食店として再生したもので、伝統的建造物群保存地区の復興の一翼を担う作品であり、「Mアパートメント」は、中庭を持つ平屋のワンルーム・ユニットを組み合わせる街角に配置し、街並み景観の形成をも意図した意欲的な賃貸住宅である。

ユニバーサルデザインに 配慮した建築物

この部門への応募は11点であり、昨年より3点少なかった。公共施設、福祉施設、学校などの応募もあったが、今回は診療所と住宅が建築文化賞となった。

「さくさべ坂通り診療所」は、自宅でのがん終末医療をサポートする在宅ホスピスの診療所であり、くつろいだデイホスピスの場となる居間を中心に、精神面も含めたケアを念頭にきめ細かな配慮が行き届いている。ウッドデッキを介して街に開かれたデザインも高く評価された。

「南流山の家」は、三世代の同居を想定した住宅であり、高齢者の生活と家族のコミュニケーションに配慮した小上がりの客間とダイニングが魅力的である。また、木格子を効果的に用いた端正な建築は、開発から35年を経過した住宅地の更新モデルとしても有効である。

環境に配慮した建築物

この部門の応募は21点であり、昨年と同数であった。住宅、公共施設、学校の応募が多く、その中から次の3点が授賞となった。

建築文化賞の「柏市立柏の葉小学校」は、環境をキーワードに掲げる柏の葉地区の先導プロジェクトであり、パッシブデザインを主体に総合的な環境配慮が細部まで行き届いている点が高く評価された。また、地域に開かれた学びの拠点としても質の高い作品である。

「雑木林のまち」は、造成された谷津地形の敷地に3棟の低層集合住宅を配置し、コナラを主体とした雑木林の再生を目指した開発である。伸びやかな敷地計画と長い時間をかけて循環型の住環境形成をはかる取り組みが高く評価された。

奨励賞の「アース・ブリックス」は、土ブロックを構造体とした小住宅であり、環境型の素材を使った挑戦の実験的意義が評価された。